
魔王（銃使い）と魔法少女（弟子）

fordforest

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王（銃使い）と魔法少女（弟子）

【Nコード】

N2285Z

【作者名】

fordforest

【あらすじ】

魔王は銃使い。

弟子は魔法少女。

魔法少女のお供は黒い猫。

情報屋は裏がありそう。

何処かズレてる。

どれを信じてもいい。

どれも信じてはいけない。

真と偽は表裏一体。

弟子と情報屋 & l t ; S c h u l e r u n d s p i t z e l & g t ; ; (前

超展開あり、中二病あり、掟破りあり、シナリオ破綻、文法滅茶
苦茶、小説の理無視、時系列バラバラ、それらが苦手なのであれば
今すぐ戻るオススメ。

手にしているグロックごしに伝わる衝撃。とある雑居ビルの地下にひっそりと作られた射撃場。もちろん非合法。

「師匠、なんで魔法を使えるのに銃を？」

俺のそばに『いやーぷろてくたー』をつけた少女が尋ねる。正確には魔法少女……だな。

「魔法が使えない状況を想定してだ。それに今の時代、剣より銃の方が信頼できる」

一発、二発。紙の的に描かれた丸い目標の中央に空いた穴。散らばる空の薬莖。

「エミ、こいつにあまり期待しないほうがいいよ。だって魔王だよ」少女の肩に乗っかっている猫のような生き物が少女に言う。そう、俺はファンタジー物の小説で言う魔王。

「そうだ。俺のところで師事を乞うよりまともな魔道士に師事を乞え。そのナマモノの言うとおりだ」

「ナマモノとか言うな！」と言いながら猫のような生き物はピョンピョンと少女の頭の上ではねとび回る。

「ゴンちゃんは、ナマモノじゃないよ」と少女が否定する。ゴンちゃんと言われた生き物は「まったくだ」と溜息を吐きながら少女の頭の上で丸くなる。

「お前は俺と共にいるべきじゃない。わかってるだろ。所詮俺は魔王。お前の敵だ」

いつもの断りの言葉。そして返ってくるのはいつもの拒絶の言葉。「いやだ。あなたに教わりたいの」

ああ、なんでこうなるんだ。

「おいナマモノ。お前から説得してくれ。面倒見てられない」
「そうしたいけど、エミは頑固だからなあ」

にゃーにゃーと鳴きながらくるくと回るナマモノ。あー、どう

してこうなった。

あれは確か半年前だったな。こんな身体になっちまってから長い年月が流れたから時間の感覚がたまに忘却の彼方へ向かいそうだが、はつきりと覚えている。半年前だ。俺が路地裏で月を眺めている時に少女と出会った。その時は『ふりる』のついた桃色の、一部の層が言う所の魔法少女みたいな服装だったな。少女の背に映える月が印象的だったのを今でも覚えている。丸い、丸い蒼い月。

「エミ、危ないよ！ アイツ魔王だよ！」

「ゴンちゃん、魔王って？」

確か俺を見てのそれぞれの第一声がそれだった。まあ、ナマモノの言うことは間違っではない。俺は確実に危険だ。世界という存在を根底から否定する存在。命という概念を根底から否定する存在。常識という概念を根底から否定する存在。一部の層が言う所の中二病みたいな存在。巫山戯ていると俺自身も思っているが、どうしようもない。世界から全てを奪われた。そして俺は世界を否定した。だからこそ俺は長い長い年月を生きながらえた。肉体は時を止め、普通の人間が認識できない魔法を使い、そして死ねない身体。とことん巫山戯てやがる。

「言っておくけど俺は戦う気力も無い。殺すなら殺せ。できないなら帰れ。ここにいても時間の無駄だ」

いつもどおりの俺の命を狙う輩に対する台詞。だが、この時だけアイツは違った答えを返した。

「なぜ、そんなことを言うの？」

俺とナマモノが思わず「ハア？」と言ってしまったのも記憶に残っている。まったくくだ。いろんな意味で衝撃的な出会いだったからな。まあ、あのあとナマモノから聞いた話だと魔法が使えるようになったのは出会いより数日前のことらしい。

仕方ないといえば仕方ない。だが、そんな心構えすら出来ていない者に戦の場へ誘うこのナマモノに不快感を覚えた。とりあえずあの時は、自分のことながらサッカー選手のように思いつき蹴り飛ばした。少女が慌てて追いかけていったのも覚えている。ああ、長い間記憶という空白の日記に新しく書きこまれた文章のように忘れられない。まったく巫山戯た出会い、巫山戯た時間、巫山戯た関係だ。なんだかんだで結局師弟関係となってしまった。それが今でも続いている。

「とつとと俺のそばから消える。そして俺に二度と近づくな」

なんと言つても少女は離れようもしない。

「だって、寂しい目をしているから」

お決まりの台詞だ。

「Und wollen eine Lerche」

そして俺も一人ごちた。

「臯月さん？」

出会いの記憶に浸っていた時にふと少女が俺を呼びかける。臯月とは俺の偽名だ。臯月伊緒里。それが俺の偽名。そして俺の俺であるための証。

「分かっているだろうけど、それは俺の偽名だ」

「うん、だけどこれ以外の名前聞いてないから
だろうな。」

「エミ、コイツの名前なんて聞く必要ないって！」

ナマモノと珍しく意見が合う。

「で、でも」

「デモもストもあるか。とにかく今日は帰れ。これから仕事だから
な」

仕事という単語に少女が身体を強ばらせる。

「また……人を殺すんですか？」

「だったらどうした？ 俺を止めるなら止める。俺は悪、お前は正義。その立ち位置は変わらない。だが、俺は行く」

俺は少女の横を通り、外へ出る。

「だが、動かないなら。それはそれでいい。お前が見るべき世界じゃない。俺のいる世界に入らないのが幸せかもな」

そうつぶやいて俺は空を舞う。眼下に広がる街。昔の光景を覚えているのであれば人間の文明とは進歩と静かな滅亡の連続だと感じる。そんな風に考えている時に胸ポケットに閉まっていた携帯電話が鳴る。何年か前に流行った『バンド』の曲を聞きながら通話ボタンの指を乗せ、軽く力を入れる。

「俺だ」

『魔王、私よ』

ああ、仲介人か。

「仕事の内容は聞いている。だが、いいのか。奴らとアイツらは抗争中だろ」

『第三者が介入した』

なるほどな。漁夫の利ってやつか。

「了解。報酬はいつも通り」

『ええ、でも今回の仕事にはそれぞれの陣営が殺し屋を雇っているわ』

「Nur ein Scherz lachen」

俺は電話を切る。そして目的地に到着した。街の端の廃ビル。抗争にはうってつけた。それに今日は月が綺麗だ。携帯型音楽プレイヤーに繋がったヘッドホンから流れる音楽を聞きながら、手にしているグロツクに魔力を注ぐ。意識が覚醒する。

「なんだお前は！」

男が言つと同時に俺は素早く狙いを定めて引き金を引く。乾いた銃声が部屋中に響き渡る。それを聞きつけてゾロゾロと男たちがなだれ込んできた。

「Es ist nur ein Teufel」

既に死んだ男に向かって先ほどの問に答える。

「殺せ！」

誰かが言うと同時に一斉に銃声が響き渡る。放たれた銃弾はまっすぐ俺に向かってくる。だが、無駄だ。

「なっ！」

「弾が逸れるだっ！」

風の魔法を使って向かってくる弾を弾き飛ばす。一部の弾は跳弾で男たちに向かって飛んだのもある。血の花が咲き乱れる。

「くそがっ！」

一人がナイフを手に駆ける。ドスツと肉が刺さる音が響く。

「へへっ」

男は笑う。だが、徐々に顔から笑みが消える。

「な、なんだよ」

それもそのはずだ。普通の人間ならありえない。既にナイフは抜け落ち、傷は既にふさがっている。とことん巫山戯た存在だ。俺は巫山戯た存在だ。

「ば、化物が！」

「Auf Wiedersehen」

俺のつぶやきと同時に手にしていたグロックが吼える。火を噴く。鉛の弾が男たちを貫く。魔力を帯びた弾が男たちの存在、時間、全てを奪う。全てを焼き尽くす。全てを無に帰す。そして、残ったのは俺と灰と結局俺の後をついてきた少女。

「……」

少女は呆然としていた。俺はつぶやく。

「だから言った。ついてくるなと」

「ま、魔王！」

ナマモノが叫ぶ。

「……早く死にたい」

俺の呟き、叶わない願い、だから少女に託す。少女を鍛え、いつ

か少女に殺されることに期待して。

「……ダメ……です」

俺の呟きに呼応するかのように少女が震えながら声を絞りだす。
答える。

「……ダメ……です。生きて……いるから……」

「だが、俺は魔王だ。滅ぼされるべき存在だ」

悪は滅び、正義が勝つ。それが当たり前。それが普通。それが、
宿命。

「それでも……です」

「…… Daughters unzumutbarren」

俺のつぶやきと共に、パンという音と共に、俺の意識が途切れ
……。

目覚めたときには、少女がそばにいた。見知らぬ部屋、俺の身体
に真っ白な包帯が巻かれていた。

「気分はどうだ、魔王さん」

少女の背後から女の声が聞こえる。

「その声、仲介人か」

「ええ、こうして会うのは初めてかしら。雪代真奈美よ。どうせ偽
名だけだね」

そう言いながら女は手を差し出す。俺はその手を握る。

「仲介人が直接接触するのは危険だ」

「ええ、でもあなたなら大丈夫よ。知ってる？ その娘、一晩中泣
いていたのよ」

「……」

「それにしてもファンタジーって本当にあるのね。しゃべるねこと
か、昔のアニメ映画を見ているみたいだったわ」

何を言っているのか分からないが、とりあえず魔法という存在自

体は認めているみたいだな。

「それはそうと、あの有名な魔王とこうして対面すると意外と普通ね」

「？」

「そこで首をかしげられても困るけど、貴方って相当有名なのよ？
そう言いながら女は『ぱそこん』の画面を俺に見せる。

「あなた、裏社会で最高賞金首よ」

そこにはゼロの数が十五桁ほど並んだ数字が俺の顔写真と共に載せられていた。

「本当にすごいわね」

「大したことじゃない」

実際のところ依頼で殺したのと襲いかかってきたから逆に殺したのを合わせたらそのぐらいになったただけだ。

「それでも殺りすぎよ。少しは自重しなさい」

「それは無理だな。ここまで来てしまったからな」

流星にここまで殺し続ければ自重することすら不可能に近い。

「ところで、あの時撃つたのはお前か？」

「いいえ、大方何処かの国のヒットマンが撃つたでしょう。あの時、その娘があなたを守ろうと必死だったわよ。貴方って意外と口リコン？」

女の言葉を見無視して俺は少女を見る。

「その娘、あなたのコレ？」

小指を立てた手を俺に見せつける。俺は静かに答える。

「違う」

うん、見事にシナリオが破綻してる。会話もキャッチボールじゃなくドッジボール。

うん、これは酷い。

これも続くかどうか俺のやる気しだいだな。

月と太陽の狭間の時間に願いを<wish Upon a Time

超展開あり、中二病あり、掟破りあり、シナリオ破綻、文法滅茶
苦茶、小説の理無視、時系列バラバラ、それらが苦手なのであれば
今すぐ戻るオススメ。

「臯月」

誰かが俺を呼んでいる。

「臯月」

女の声だ。

「臯月」

ああ、俺が人間でいた頃の。

「臯月」

俺が魔王になってしまっまでの。

「臯月」

俺の大切な存在。

空を見あげる。そこには白と銀に染まった月が煌々と光を照らしていた。

「いい夜だ」

手にしているグロックから夜風が伝う。月の光には力がある。人を魅せ、人を狂わせ、人を愛しく。

そして白銀の月は世界を晒す。

「Treppe zum Himmelと言ってもいいかもな」

苦笑しながら俺は『びる』の屋上から飛び降りる。目の前には標的が乗る黒塗りのリムジン。政財界の重鎮にして裏社会の元締め。そいつを殺すのが今回の目的。依頼ではない。単にそいつのせいで殺された哀れな少年に対する復讐だ。

ズドンと音を立てて俺はリムジンの「ぼんねつ」に着地する。

刹那、銃声と共に銃弾が俺の耳を掠める。

「Zur Holle fahren」

不満をぶちまけながら、俺は引き金を引く。連続で引き続ける。リムジンに乗っていた人間は全て新しい穴が開いていた。周りの通行人が悲鳴を上げながら逃げ惑う。

そして空から響き渡る「へりこぶたー」の風切り音。機体には御丁寧に警視庁の文字とお馴染みの紋章。

「nutzlos」

手にしている銃に魔力を注ぎ込む。魔力の流れを想像する。物を想像する。全てを想像する。想像は力となる。魔力はそれを実現する。

「ば、化物が！」

標的の男が叫ぶ。化物……か。俺には似合いの言葉だ。

「Auf Wiedersehen」

引き金を引く。「すらいど」が動く。薬莢が飛ぶ。銃声と共に弾丸が放たれる。男の身体に新しい穴が開く。そして弾に移った魔力を操る。爆発の「いめーじ」を描く。

「Druckwelle」

男の身体が風船が破裂するようにパンと音を立てて文字通り吹っ飛んだ。あたり一面に赤い肉の欠片が飛び散る。

俺の頬に男だった肉の欠片が付着した。気持ち悪い。

「あ、あ、あああつあああつあああつあああつあああつあああ

あ！」

それを見ていた取り巻きの男たちが狂ったように叫びながら出鱈目に発砲していた。

「Mitleid」

俺の周りの空間の光を操って自分の姿を消す。男たちは俺の姿が消えたことに気づかずにはやたらめったらと撃ち続けていた。そしてお決まりの同士討ち。本当に哀れだ。

「！」

そんな考えがよぎった刹那に異変を感じた。俺はその場を離れる。直後に俺がいた場所は地面が決れ、すり鉢状の穴になっていた。

「……また勇者か」

その穴の中心には一人の若い男。手には魔封じの剣。

「魔王か」

「ああ」

「死ね」

いきなり切りかかってくる勇者を俺は受け入れる。俺は今度こそ死ねるのだろうか。

「！」

胸に伝う痛み。流れる紅い血。そして安らかな死への誘い。

「今度こそ俺は死ねる……そのはずだ」

「何を言っているお前は死ぬんだよ」

さらに深く剣が刺さる。ああ、これだ。これが俺の待ち望んでいた死だ。

「なっ！」

急に勇者が俺から離れる。

「なぜだっ！なぜ貴様は死なない！」

え？

「なぜ貴様に神の恩恵が与えられているんだ！」

なにを言っている？

「その印！」

印？

「これ……は……？」

俺の身体を貫く剣のそばに見える俺の身体に刻まれた身に覚えのない印が仄かに光っていた。

「あ、あ、あああああああああああああああああ！」

とたんに俺の意識が急速に目の前の光景を闇へと突き落とすとしていく。

もうなにも見えない……何も……。

気がついた時には、またあの情報屋の隠れ家のソファで横になっていた。

「気がついた？」

例の情報屋だ。

「ああ」

「貴方が不死身だって噂を聞いたことがあるけど、まさか本当だったとわね」

情報屋は手にしていた『まぐかつぶ』に『こーひー』を注ぐ。

「飲む？」

「苦いのは苦手だ」

「あらあら」と言いながら情報屋は「トトリと」てーぶる『』の上に置く。

「で、あいつは？」

「あいつって？」

とぼける気か？

「まあ、いい。それより俺を刺した男は？」

「ああ、彼？ 身元不明で、現在警察病院の方に入院中よ」
なるほどな。

「ああ、それとさっきの問いただけど、思わず連絡しちゃった」

「オイ」

しばらくして Bannon と音を立てて扉が開くと同時に少女が俺に向かって泣きながら抱きついてきた。俺が安らかに死出の旅に出れる日は来るのだろうか。

月と太陽の狭間の時間に願いを<math>it{Wish}</math> Upon a Time

ようやく第2話ですが、魔法少女の活躍が0な件。あと使い魔の活躍も0な件。これはひどい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2285z/>

魔王（銃使い）と魔法少女（弟子）

2011年12月28日01時54分発行